

台東区の玩具産業に関する考察

深津 千鶴

台東区の最南東部に位置する、浅草橋・柳橋・蔵前・駒形・寿にかけての地域には、一大玩具問屋街が形成されている。

台東区は、南北に流れる隅田川によって、墨田区と隔てられているが、その西隣を並行して走る江戸通りは、この地域の重要な交通路である。

この江戸通りを中心に、人形・種々の玩具（羽子板・節句品、模型玩具、児童用乗物、教材模型、ゲーム類、ホビー商品、ファンシーグッズ等）・花火等を取り扱った卸売業問屋と製造問屋の商店がずらりと軒を並べている景観は独特のものである。玩具・人形の他に、季節の飾り、文具、工作用品等の商店も多く、それらが混在している状態である。

また、人形は浅草橋・柳橋に、玩具は蔵前に特に集中している。

玩具卸売業は、東京・大阪・愛知への集積は他を引き離して卓越しており、商店数で5割、年間販売額で7割がこの上位三都府県へ集まっている。特に東京への集中は著しく、対全国構成比は、商店数で26.6%、年間販売額で41.2%である。

一般に卸売業は東京へ集中する傾向があるが、玩具卸売業のそれは、平均値（対全国構成比、商店数で14.7%、年間販売額で36.8%）を大きく上回っている。

ここに、玩具卸売業の大都市集中型という特色が表れている。

さらに、東京においては、台東区への集中が著しく（東京全体に占める構成比は、商店数で38.5%、年間販売額で48.8%）、そのうちの大部分がこの問屋街に含まれているのである。

この玩具問屋街の発端は、明治初期、下級士族の職人化と共に発生した「金属加工業」である。彼等の居住地であった浅草・本所・馬喰町周辺がその発祥地となった。

もうひとつの発端は、江戸時代末期既に、神田地域に出現していた玩具問屋である。

この玩具問屋は、製造業者及び職人を資本的に

支配し、問屋制を確立させた。

後、製造業者及び職人は、隅田川を隔てた江東・葛飾・向島等の地域に、問屋は浅草橋・蔵前地域（即ち、今在る問屋街）へと移転し、今に至っている。

玩具産業は、典型的な中小企業分野であるが、戦後の輸出産業の花形としての成長は目ざましいものであった。

しかし、1971年のドル・ショック、1973年のオイル・ショックを機に、輸出中心から内需中心へと転換がなされ、そうした中で、卸売業に次ぐもうひとつの問屋として、製造問屋が登場し、流通の中核機能を果たすようになった。

また、こうした背景の下で、商品の性質も変化を遂げ、特に昭和50年代以降は、第一にプライベートのある高付加価値、高性能な玩具の開発、第二に、従来の玩具から一歩外へ踏み出した分野への進出、及びそれに伴う、消費者年齢層の拡大等が目立つようになった。

台東区の玩具卸売業商店数及び年間販売額は共に、実数・構成比ともやや減少しているが、依然問屋機能の中核を把握している。

それは、この地が、製造問屋にとって最も重要な情報掌握力を有しているからであろう。

近年は、地価高騰及び地域過密化が進み、倉庫スペースの不足・商品搬出入の困難といった問題も深刻となり、今後は増々情報機能、「カオ」機能の比重が高くなると考えられる。

商品の性質上、この「カオ」機能は重要で、この問屋街は、それを発揮する場としてたいへん価値がある。業界では、企業連合や組合による「見本市」も盛んである。

台東区の玩具卸売業の現状及び将来は、決して楽観ばかりできないが、今後は更に、行政の力や大きな資本力を貸りた設備改良、及び「見本市」開催、そして何よりも、アイデア開発力に磨きをかけることが重要になっていくだろう。

なお文中の統計は昭和60年商業統計によった。